近世広場の諸形態

渡 辺 達 三

The Forms of the *Square* in the Feudal Age of *Edo*

by Satomi WATANABE

1. 序

わが国の歴史のうえで、近世には機能的にも空間的にも最も多様な形態の広場をみることができるが、西欧諸国にみられるような実体としての広場の存在は一般に貧相であるといわなければならない。実体としての広場の不在は他の空間の広場の性格・転用を招来するが、その考察の視点は、当然のことながら、機能的なアプローチが中心となるであろう。そしてその広場の性格はそれが媒介されるもとの空間の性格が反映され、それにより規定される面が大きい。それゆえ広場の性格はその機能と空間的・機能的由来との関係において明らかにされなければならないであろう。

本論ではまず近世広場に求められる機能をみ、その機能とその空間的由来とを考慮しつつ、いくつかの広場の形態を呈示し、そのような広場の若干について、その空間的・機能的な性格について考察することが意図されている。

なお本論のなるにあたって日本大学教授横山光雄、東京大学教授古島敏雄、岡山大学教授藤沢晋、徳川林政史研究所所長三男、建築評論家伊藤鄭爾の各位に多大な御教示をいただいた。厚く謝意を申しのべる。

2. 近世広場の機能と諸形態

近世幕藩体制の基盤は近世封建都市・村落共同体におかれているが、そのような共同体は一定度の自治をもつ一つの地縁的共同組織であり、この共同体はその結合の象徴的核あるいはその自治活動・レクリエーション活動、その他の共同体成員相互間のコミュニケーション実現に必要な種々の集會合の場を必要とするであろう。そのような共同体内の諸機能を実現する空間が共同体型広場である。

他方領主権力は共同体支配実現のための種々の情報提供・獲得、その他の必要より生ずる共同体への領主側の楔でありまたその情報センターとしての空間を設ける。それは共同体成員の集會合の集積度の高い立地におかれるが、成員の情報獲得の必要がそこにおける成員のより

いっそうの集會合的機能の集積を誘発し、そこが広場としての性格をもつ例も少くない。そのような性格を第一義的に有する広場は、共同体側よりみると、被支配型広場といえることができる。そしてそのような広場はそこに高札場が設けられる、高札場型広場の形態をとる場合が多い。

さて共同体型広場は共同体の種々の集會合の場として機能するものであるが、そのうちで最も重要な広場は、その精神的結合の核であり、しかも共同体自治実現のための集會合がその第一義的な意味をもつような共同体の公共生活の中心としてのそれであり、それは中央核型広場といえることができる。中央核型広場は、共同体の精神的・物理的な共同の集會合の中心としての機能を第一義的にもちながら、さらにそれに各成員の公的私的なレクリエーション社交等の諸機能が加わる。そのような広場の代表的な例は鎮守の杜といわれる社寺の境内地にみられる。

共同体内には中央核型広場のほかに、それよりも広場的諸機能の集積度の小さい広場がいくつかみられる例も多い。それらは寄合集會、市場、レクリエーション等の単一機能ないしはその複合度の小さい機能に媒介される、あるいは共同体のある限定された地域において利用される広場であり、前者は各種型広場、後者は局地型広場といえることができる。

以上の広場はそのウエイトの差はあっても共同体の公共生活実現上の社会的・経済的・政治的・宗教的・慰楽

図一 広場の機能・形態模式図

的・防災的な諸機能をになっているといえる。

さて広場はその機能的成因的なアプローチなどにより種々に分類することが可能であると考えられるが、ここではその広場の空間がそれにより媒介されるものの空間の性格を考慮し、それに機能的な性格を加味して図-1のような分類を試みた。

3. 近世広場の若形の形態例

つぎに、以上あげた広場の諸形態のうち、その代表的な例についていくつか考察してみたい。

なお図-2のように、平時、特別な意味をもたない空

図-2 盆踊り¹⁾

図-3 尾張海東郡平岡村²⁾ 社寺のその宗教的な教義は

図-4 神社境内相撲³⁾ すでにみたように地縁化し、

共同体成員全員に受け入れられるようなそれに変質するその近世化をみたが、それは共同体結合の精神的な核として機能するに適合する変質であった。

さらにその境内地はそのうちにかなりの空間容量を有するのが一般的であり、そこでの寄合・レクリエーション等の各種の集会の場としても適していた。図4～6は社寺境内地の使われ方のいくつかを示したものである。

図7～8は社寺の境内図を示したものであるが、図8では、常設であろうか、相撲場がみえている。

図-9～11では社寺の参道・門前の道路等が広巾員に拡張され、その部分の広場としての積極的な意義を

推定することができる。

1) 徳川林政史研究所蔵 天保12年

2) 会津若松市五十嵐竹雄氏蔵 年代不詳

3) 三味堂 新板八重桜

4) 岩淵寺 同

5) 徳川林政史研究所蔵 天保12年

6) 善光寺道名所図会 天保15年

7) 徳川林政史研究所蔵 年代不詳

8) 9) 同所蔵 天保12年

3-2 高礼場型広場

高礼場は人々の集會合し目につきやすい橋詰、辻等の

図-5 社寺境内童遊戯³⁾

図-6 社寺境内観花飲食⁴⁾

図-7 尾張海東郡森山村部分⁵⁾

図-8 神社境内⁶⁾

図-9 尾張海東郡方領村⁷⁾

図-10 尾張中嶋郡須ヶ谷村部分⁸⁾

図-11 同春日井郡大曾根村部分⁹⁾

場所に設けられる。城下町にあっては、大手門近くの町屋の目貫通りに、領主側の空間に接して設けられる例が多いが、このことは高札場が一面で領主と共同体とを相互に媒介する機能をも有する空間であることの空間的反映としてみることができ興味ぶかい。

図-12~13はそのような江戸、鹿児島における高札場広場の例であるが、いずれの場合も高札場部分が拡張されている。そして鹿児島の場合には「広小路 下札ノ辻はヨリ御領威中道法出ル 小道具ルイ日店アリ」³⁾とあり、そこに市店その他がおかれている広場空間としてのにぎわいを推定することができる。

1) 寛永江戸図部分 明暦3年頃

2) 薩州鹿児島図 年代不詳
広小路は「下ノ札ノ辻広

小路」とあり、広小路内北西に水道がみえている。

3) 薩藩沿革図書 天保8年

3-3 道路・街路型広場

道路は一面で集落間を結合するが、他面で集落内の各住居相互間を結合する機能を有する。そして集落内の各成員間結合の交通機能は他の集会・祭礼等の広場的諸機能を誘発し、集落内における道路の巾員の拡張をもたらす例も少なからずみられる。

図-14 は尾張の一村藩戸田村の部分絵図を示したものであるが、道路巾員が集落内において拡大されている様子を見ることができる。また図-15は山陽道の宿場集落の一、矢掛町を示したものであるが、その往還が宿内できわめて広巾員に拡張されているのを知りうる。宿外の巾員が1間であるのに対し、宿内はみかけ上5間にも達している（往還敷は3間であるが、両側の軒線が各1間後退している）。

このような往還はそれ自体、広場としての機能を一定度有していたものと考えられる。矢掛宿の例では、その集落の性格上、道路の広巾員は領主側の必要上なされたものと推定されるが、往還には高札の他に胡社がまつら

図-12 寛永江戸図部分¹⁾

図-13 薩州鹿兒島図²⁾

図-14 尾張海東郡戸田村部分¹⁾

図-15 備中小田郡矢掛町部分²⁾

れ、その祭礼がそこでにぎやかにとりおこなわれた。

さらに往還の辻、十字路、橋詰等において、その巾員が広がり、その部分が広場としての意義をもつ例がある。図-16～20はそのような可能性を示す例である。図-16は市場集落枇杷島を示したものであるが、市場広場は家屋、金剛寺等により囲まれ閉鎖的な空間を形づくり、そこに高札がおかれ、広場としての空間的成熟を推定しうる。図-19では十字路部分の中央に市場かなにかの施設をみることができる。

図-20は温泉場部分の往還の拡張された例である。

- 1) 徳川林政史研究所蔵 弘化4年
- 2) 石井家文書 岡山大学教育学部管理 天明2年
- 3) 徳川林政史研究所蔵
- 4) 同所蔵 弘化4年
- 5) 同所蔵 天保12年
- 6) 同所蔵 弘化4年
- 7) 善光寺道名所図会 天保15年

図-16 尾張春日井郡枇杷島³⁾

3-4 街区内中庭型広場

図-21 は寛永年間の江戸日本橋・神田付近を示したものであるが、この部分は京都の町割が採用され、その

図一17 尾張海東郡古道村⁴⁾

図一18 尾張海東郡樽水村部分⁵⁾

図一19 尾張春日井郡久地野村⁶⁾

図一20 信濃小県郡別所村⁷⁾

いに消滅していった。

街区内中庭型広場は他の城下町にも一般的にみられたが、江戸同様、近世中後期のその都市の発展とともにしだいに消滅していった。

- 1) 武州豊嶋郡江戸庄図部分 寛永年間
- 2) 千代田区史
- 3) 承応～寛文期の江戸図によってその変質過程を知りうる

図一21 寛永江戸図部分¹⁾

3-5 貸家団地中庭型

図一23は享保16年の富山家の江戸京橋の貸家団地の部分を示したものであるが、貸家に囲繞されたかなりの面積(200坪前後)の中庭がみられる。そこには稲荷がまつられ、さらに芥溜等がおかれている。正徳5年の指図によると、この部分はすべて貸家でうまっていたそこに路地が入っているのみであったが、正徳5年から享保16年の間に、ここに中庭広場が設けられるようになったこ

図一22 町割の標準²⁾

初期には図一22のような街区内に20間の中庭が設けられた。この中庭は、中世の立ちうり町で考察したと同様の機能を有していたと考えられる。しかしそれも江戸の市街地が稠密になるにつれ、その内に小路が設けられ、建築物がたてられて、しだ

図-23 江戸京橋貸家団地部分¹⁾

図-24 飛騨郡上八幡町¹⁾

とを知りうる。この広場は街区中庭広場同様、団地の居住者の共同の庭広場として、日常生活に密着して機能していたと推定される。

1) 京橋家指図享保16年富山家文書 文部省史料館蔵

3-6 升型・勢屯型広場

升型・勢屯等は主として城下町の軍事施設として設け

図-25 熊本城下町²⁾

られた空地であるが、その空間の性格から、かなりの面積を有し、また都市内の要所におかれる可能性が大きく、そこは平時において被支配者の広場としても機能することが推定される。図-24は飛騨郡上八幡町の絵図であるが、キコク升型が本町・大手横町近くにある。図-25は熊本城下町絵図であるが、市内の辻、城下町の入口等各所に勢屯をみることができる。

1) 岐阜県史 寛文年間

2) 熊府之図 国立国会図書館蔵 年代不詳

Summary

This is a study on the forms of the *square* in the feudal age *Edo*. Firstly, the author presents the idea that the *square* in the feudal age is able to be classified into two types, the one is *dominated type square* which functions as one of the spatial medium by which the feudal lord side dominates the *Gemeinde*, and the other is *self-contained type square* which functions as an important spatial medium by which the members of the *Gemeinde* communicate personally and spiritually each other, and the latter type is able to be classified as three types, *nucleus*, *quasi-nucleus*, and *local type*.

And secondly, tempering above mentioned functional viewpoint with the spatial character of the original space by which *square* is mediated, the author pre-

sents some sub-types of the *square* and tries to study some of them. They are as follows :

1. *shaji keidai monzen gata* the fronts and the precincts of the shrines and the temples
2. *kōsatsuba gata* areas around the notice-board which is set by the feudal lord side to dominate the *Gemeinde*

3. *dōro gairo gata* street
4. *gaikunai chūtei gata* courtyard place which is surrounded by the street
5. *kashiya danchi chūtei gata* courtyard place which is surrounded by the houses to let
6. *masugata seidamari gata* military open square